

きょうげん かんしょう 狂言鑑賞のために

おおくらりゅう やまもとかい
大蔵流 山本会

きょうげん あゆ 狂言の歩み

きょうげん むろまち じだい むかし こんにち ねん つづ
狂言は、室町時代の昔から今日まで、650 年も続
いた芸能です。ごく初期には、農作業の節目に、
じんじゃ さいれい いち た ひとびと あつ
神社の祭礼に、市の立つところに、人々が集まって
そつきようてき おこな
即興的に行われていた、とて
そぼく すんげき
も素朴な寸劇でした。そのう
ち、面白いもの、人々の心に
のこ 残ったものなどが繰り返し
わられるうちに、だんだんと形
づくられました。まとめて
いっただ人は、玄恵法印という
お坊さんだといわれています。
えど じだい ばくふ
江戸時代になると、幕府は

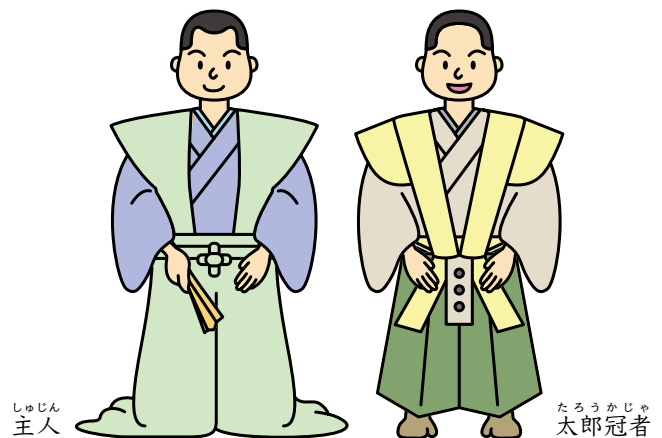


のうがく しきがく せいしき ぎしき つか おんがく
能楽を式楽(正式な儀式で使う音楽)にしました。そ
れからは、能と狂言が一番として能舞台で演じられ
るようになり、狂言師たちは禄(給料)を与えられ、
せんもんか だいだいきび しゅぎょう か
専門家として代々厳しい修行が課
せられました。

めいじ じだい しきがく
明治時代になると式楽として
の位置づけはなくなりましたが、
きび けいこ かき げい つた
厳しい稽古を重ねて芸を伝えて
いく伝統は守られ、今日では
でんとう まも こんにち
世界的に見ても貴重な芸能とし
て、能とともにユネスコの世界
むけい いさん にんてい
無形遺産に認定されています。

きょうげん 狂言とは

きょうげん れきし じょうゆうめい ひと とくてい じんぶつ で
狂言には、歴史上有名な人や、特定の人物は出てきま
せん。わたしたちの身近にいるような人ばかりで、内容も
にちじょう どうじょうじんぶつ だいみょう しゅじん ちほう
日常よくあるものです。登場人物は大名(主人。地方の
しょうりょうしゅ のうそん どちらく ぶし たろう かじゃ じゅうしゃ
小領主、農村に土着した武士)、太郎冠者(従者。
めしつかい おっと つま やまぶし そう どうぶつ
召使)、夫、妻、山伏、僧、動物などです。
きょうげん み たの おもしろ おも おお
狂言は見て楽しむものです。面白いと思ったら大いに
わら 笑い、へんだなと思ったら大いに考えてください。



じぎょうめい 事業名 令和 3 年度 文化芸術による子供育成総合事業 —巡回公演事業—

こうえんだんたいめい 公演団体名 大蔵流狂言 山本会

こうえんしゅもく 公演種目 狂言公演

じぎょうがいよう 事業概要 文化芸術による子供育成総合事業—巡回公演事業—

わ くに いちりゅう ぶんか げいじゅつだんたい しょうがっこう ちゅうがっこうなど こうえん こども すぐ ぶたい げいじゅつ かんしょう
我が国の一流の文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた舞台芸術を鑑賞する
機会を得ることにより、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術
鑑賞能力につなげることを目的としています。

じぜん じつえん しどう また かんしょう しどう おこな じつえん こども
事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演では、できるだけ子供
たちにも参加してもらいます。

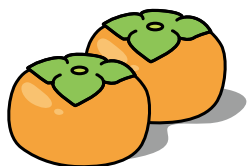


かきやまぶし [柿山伏]

おおみねさん かつらぎさん しゅぎょう お やまぶし
大峰山と葛城山で修行を終えたばかりの山伏が、
出羽の羽黒山へ帰る途中のこと。お腹がすいてふと見
ると、みごとな柿の木があります。山伏は勝手に木に
登って柿を食べはじめました。そこへやってきた柿の
木の持ち主。上から飛んできた柿の種に気づいて見上
げると、なんと山伏が大切な柿を盗み食いしているで
はありませんか。さてどうやって懲らしめてやろうか。
あれはカラスに違いないと、カラスの鳴きまねをさせ
ます。一生懸命に鳴きまねをする山伏。次はサル、次
はトビ。柿の持ち主は「トビなら飛びそうなものだ」
とはやし立てます。山伏も決心をして、高い木のうえ
から「ヒー、ヨロ、ヨロ」と飛んだのですが。

[解説]

しゅぎょう つ やまぶし ふつう ひと も え のうりよく
修行を積んだ山伏は、普通の人では持ち得ない能力
(法力)を持っていると考えられていました。そんな
山伏でも、お腹がすくと人のものを盗み食いするもの
なのです。トビのまねをして柿の木から落ちてしまっ
た山伏。柿の持ち主に、「家まで背負って行って治療し
ろ」とおどしますが、結局は背中から振り落とされ、
法力の無いことまであからさまになってしまいました。



桶おけ

どうぐ [道具]

ほとんどが象徴的
なものです。なか
でも、かずら桶とい
うウルシ塗りの桶を
よく使います。酒樽、床几（腰掛）、茶壺、そし
てときには樹木の役も果たします。また、桶の蓋
は酒盛りのときの盃や茶碗にもなります。



おうぎ み まい しよさ つか
扇はいつも身につけていて、舞の所作に使う
ほか、扇でお酒を注いだり受けて飲んだりしま
す。またあおいで火を起こしたり、
ときにはのこぎりや
刀として使うこ
ともあります。



扇おうぎ

ぶす [附子]

しゅじん がいしゅつ ふたり めしつかい たろう かじゃ
主人は外出するにあたって、二人の召使、太郎冠者
じろう かじゃ たいせつ しなもの しゅじん い
と次郎冠者に大切な品物をあずけました。主人が言う
には、その品物は附子というもので、その方向から吹
いてくる風にあたるだけで人間が消えてなくなってい
まうというたいへんな毒。でも太郎冠者は中身を見た
くてたまりません。そこで二人は風が吹いてこないよ
うに扇であおぎながらふたを開けることにしました。
そこで見たものはおいしそうな黒砂糖。忠実な召使に
うそ 嘘までついて出かけた主人への不満もあったのでしょ
う。二人は黒砂糖をぜんぶ食べてしまいました。さあ、
そろそろ主人が戻ってくる時間。このままではひどく
しか 叱られてしまうのは目に見えています。そこで太郎
冠者は一計を案じました。

[解説]

とうじ さとう きょうばん しゅじん
当時、砂糖はたいへんな貴重品でした。主人はこっ
そり自分だけで食べようとして、嘘までついて出かけ
たのでしょうか。主人の弱みをついた太郎冠者。なん
て知恵の働く召使でしょう。

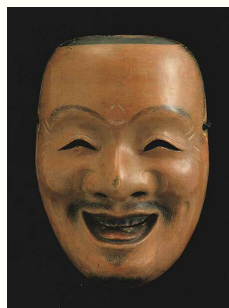
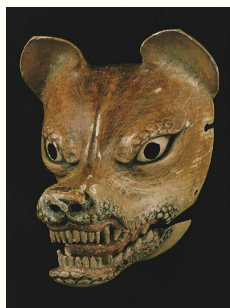
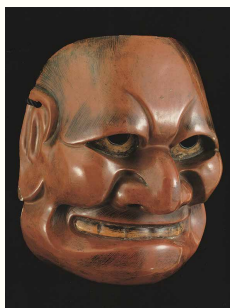


みんなであうたおう♪

きょうげん かぎゅう うたい 狂言 [蝸牛] の謡

あめ かぜ ふ て かまう わ て かまう わ
雨も風も吹かぬに 出ざ釜打ち割ろう 出ざ釜打ち割ろう
でんでんむしむし でんでんむしむし (何度も繰り返す)

あめ ふ かぜ ふ てんき
雨も降らず風も吹かないとってもいい天気なのに、
かお かま かいがら
顔を出さないなら釜（貝殻）を わっちゃうよ、カタツムリさん

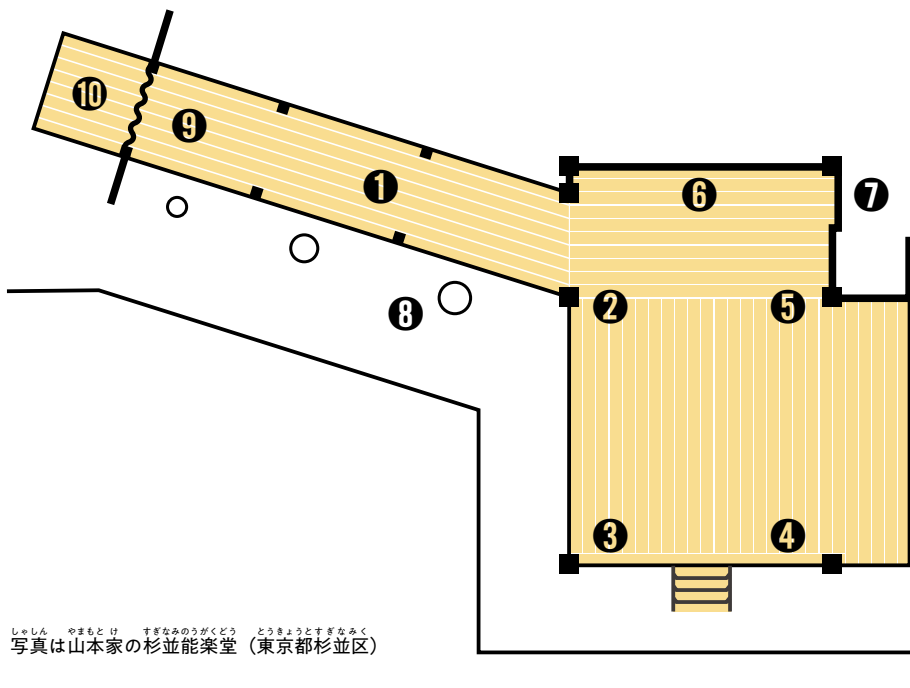


おもて [面]

のう おもて たいはん
能では面をつけることが大半です。
きょうげん ひためん い すが お だいぶぶん
狂言は直面と言って、素顔が大部分で
すが、「鬼」「動植物」（狐、狸、猿な
ど）「老人・老女」「神さま」「幽霊」
などでは面を使用することがあります。

のうぶたい 能舞台を見る

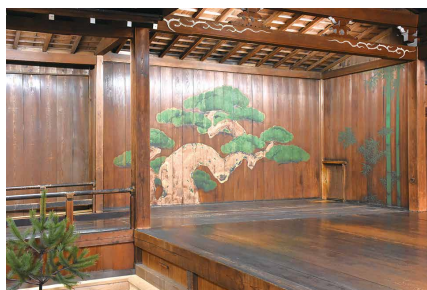
のうぶたい よんほん はしら さき しやく ぶたい はしがか よ
能舞台は、四本の柱に支えられた四角な舞台と、橋掛りと呼ばれ
る廊下のような部分からできています。屋根があるのは、昔、
やがい つく なごり 野外に作られていた名残です。



写真は山本家の杉並能楽堂（東京都杉並区）



舞台から①橋掛りと⑦揚幕へ



舞台から⑦切戸口へ



①橋掛りから舞台へ



舞台の上に作られた屋根

① 橋掛り

えんじや でい つうろ ぶたい えんちよう
演者が出入りする通路。舞台の延長として、
ここで演技が行われることも多い

② シテ柱

シテ（主役）がこの柱の近くに立つことが
多い

③ 目付柱

能面を付け視野が狭くなった演者の目じる
しになる

④ ワキ柱

ワキ（主役の相手）がこの柱のそばに居る
ことが多い

⑤ 笛柱

笛を吹く人（囃子方。楽器の演奏者）がこ
の近くに座る

⑥ 鏡板

老松が大きく描かれている。神が松に宿り、
その神に芸能を捧げると伝えられる

⑦ 切戸口

地謡（合唱の人）や後見（補助する人）の
出入りに使う

⑧ 一ノ松・二ノ松・三ノ松

橋掛りの前の三本の松。順に小さくして
遠近感を出している

⑨ 揚幕

演者が出入りするときに揚げる五色の幕

⑩ 鏡の間

揚幕の奥にある大きな鏡を備えた部屋。
演者が最終的な身支度をする

だんたいしょうかい 団体紹介

おおくらゆうきようげん やまもと け むろまち じだい はじ きょうげん いま つた いえがら どうきょう ちゅうしん かつどう
大蔵流狂言の山本家は、室町時代に始まった狂言を今に伝える家柄で、東京を中心に活動しています。
えど じだい ばくふ せいしき ざしき ば きょうげん つと かくちようたか きはく み げいふう も
江戸時代には幕府の正式な儀式の場で狂言を勤めていたので、格調高く、気魄に満ちた芸風を持っています。

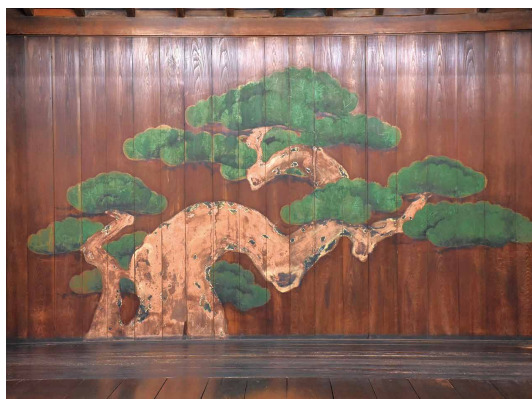
狂言鑑賞のために

おおくらりゅう
大蔵流 山本会



狂言の歩み

狂言は、室町時代の昔から今日まで、650 年も続いた芸能です。ごく初期には、農作業の節目に、神社の祭礼に、市の立つところに、人々が集まって即興的に行われていた、とても素朴な寸劇でした。そのうち、面白いもの、人々の心に残ったものなどが繰り返し行われるうちに、だんだんと形づくられました。まとめていった人は、玄恵法印というお坊さんだといわれています。江戸時代になると、幕府は



能楽を式楽（正式な儀式で使う音楽）にしました。それから、能と狂言が一番として能舞台で演じられるようになり、狂言師たちは禄（給料）を与えられ、専門家として代々厳しい修行が課せられました。

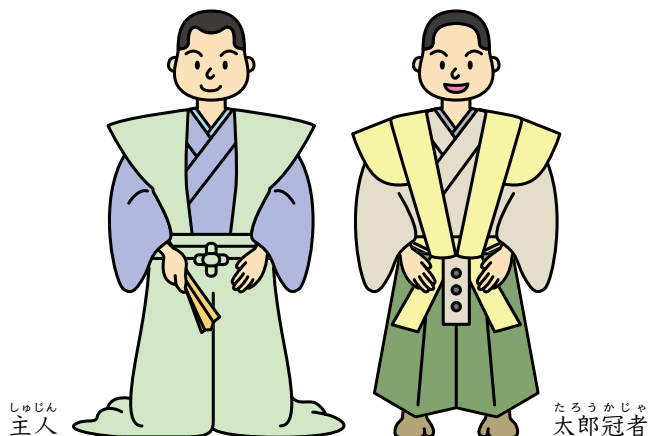
明治時代になると式楽としての位置づけはなくなりましたが、厳しい稽古を重ねて芸を伝えていく伝統は守られ、今日では世界的に見ても貴重な芸能として、能とともにユネスコの世界無形遺産に認定されています。



狂言とは

狂言には、歴史上有名な人や、特定の人物は出てきません。私たちの身近にいるような人ばかりで、内容も日常よくあるものです。登場人物は大名（主人。地方の小領主、農村に土着した武士）、太郎冠者（従者。召使）、夫、妻、山伏、僧、動物などです。

狂言は見て楽しむものです。面白いと思ったら大いに笑い、へんだなと思ったら大いに考えてください。



事業名 令和3年度 文化芸術による子供育成総合事業 一巡回公演事業一

公演団体名 大蔵流狂言 山本会

公演種目 狂言公演

事業概要 文化芸術による子供育成総合事業一巡回公演事業一

我が国の一流の文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた舞台芸術を鑑賞する機会を得ることにより、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力につなげることを目的としています。

事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演では、できるだけ子供たちにも参加してもらいます。

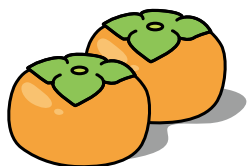


かきやまぶし [柿山伏]

おおみねさん かつらぎさん お
大峰山と葛城山で修行を終えたばかりの山伏が、
出羽の羽黒山へ帰る途中のこと。お腹がすいてふと見
ると、みごとな柿の木があります。山伏は勝手に木に
登って柿を食べはじめました。そこへやってきた柿の
木の持ち主。上から飛んできた柿の種に気づいて見上
げると、なんと山伏が大切な柿を盗み食いしているで
はありませんか。さてどうやって懲らしめてやろうか。
あれはカラスに違いないと、カラスの鳴きまねをさせ
ます。一生懸命に鳴きまねをする山伏。次はサル、次
はトビ。柿の持ち主は「トビなら飛びそうなものだ」
とはやし立てます。山伏も決心をして、高い木のうえ
から「ヒー、ヨロ、ヨロ」と飛んだのですが。

[解説]

修行を積んだ山伏は、普通の人では持ち得ない能力
(法力)を持っていると考えられていました。そんな
山伏でも、お腹がすくと人のものを盗み食いするもの
なのです。トビのまねをして柿の木から落ちてしまっ
た山伏。柿の持ち主に、「家まで背負って行って治療し
ろ」とおどしますが、結局は背中から振り落とされ、
法力の無いことまであからさまになってしまいました。



桶おけ

[道具]

ほとんどが象徴的
なものです。なか
でも、かずら桶とい
うウルシ塗りの桶を

よく使います。酒樽、床几（腰掛）、茶壺、そし
てときには樹木の役も果たします。また、桶の蓋
は酒盛りのときの盃や茶碗にもなります。



おうぎ
扇はいつも身につけていて、舞の所作に使う
ほか、扇でお酒を注いだり受けて飲んだりしま
す。またあおいで火を起こしたり、
ときにはのこぎりや
刀として使うこ
ともあります。



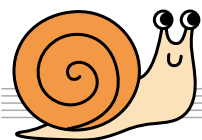
扇おうぎ

ぶす [附子]

主人は外出するにあたって、二人の召使、太郎冠者と次郎冠者に大切な品物をあずけました。主人が言うには、その品物は附子というもので、その方向から吹いてくる風にあたるだけで人間が消えてなくなってしまうというたいへんな毒。でも太郎冠者は中身を見たくてたまりません。そこで二人は風が吹いてこないように扇であおぎながらふたを開けることにしました。そこで見たものはおいしそうな黒砂糖。忠実な召使に嘘までついて出かけた主人への不満もあったのでしよう。二人は黒砂糖をぜんぶ食べてしまいました。さあ、そろそろ主人が戻ってくる時間。このままではひどく叱られてしまうのは目に見えています。そこで太郎冠者は一計を案じました。

[解説]

当時、砂糖はたいへんな貴重品でした。主人はこっそり自分だけで食べようとして、嘘までついて出かけたのでしょうか。主人の弱みをついた太郎冠者。なんて知恵の働く召使でしょう。

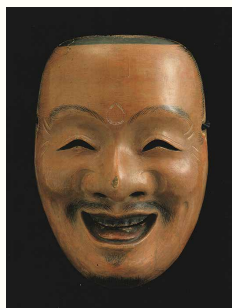
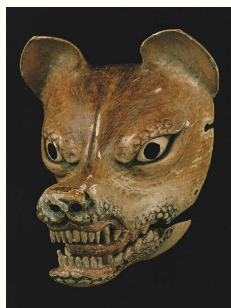
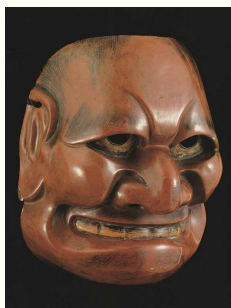


みんなであうたおう♪

狂言 [蝸牛] の謡

雨も風も吹かぬに 出ざ釜打ち割ろう 出ざ釜打ち割ろう
でんでんむしむし でんでんむしむし (何度も繰り返す)

雨も降らず風も吹かないとってもいい天気なのに、
顔を出さないなら釜(貝殻)を わっちゃうよ、カタツムリさん



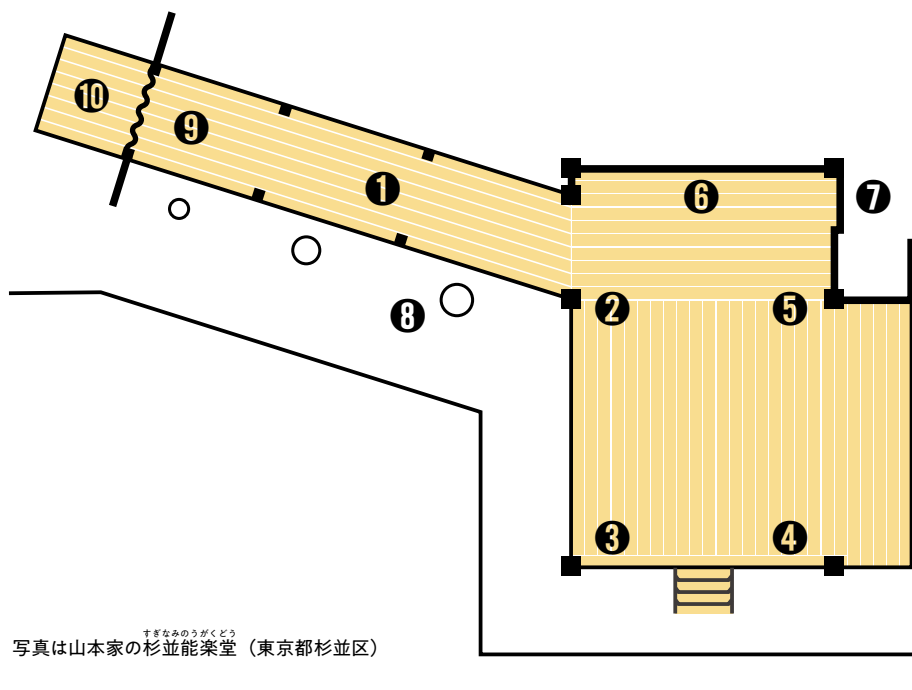
おもて [面]

能では面をつけることが大半です。狂言は直面と言って、素顔が大部分ですが、「鬼」「動植物」(狐、狸、猿など)「老人・老女」「神さま」「幽霊」などでは面を使用することがあります。



能舞台を見る

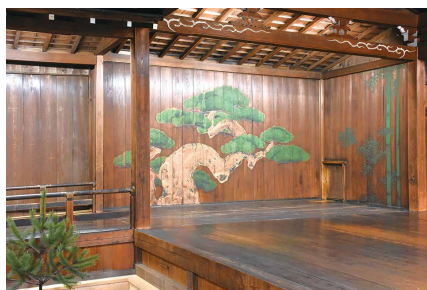
能舞台は、四本の柱に支えられた四角な舞台と、橋掛りと呼ばれる廊下のような部分からできています。屋根があるのは、昔、野外に作られていた名残です。



写真は山本家の杉並能楽堂（東京都杉並区）



舞台から①橋掛りと⑨揚幕へ



舞台から⑦切戸口へ



①橋掛りから舞台へ



舞台の上に作られた屋根

① 橋掛り

演者が出入りする通路。舞台の延長として、ここで演技が行われることも多い

② シテ柱

シテ（主役）がこの柱の近くに立つことが多い

③ 目付柱

能面を付け視野が狭くなった演者の目じるしになる

④ ワキ柱

ワキ（主役の相手）がこの柱のそばに居ることが多い

⑤ 笛柱

笛を吹く人（囃子方。楽器の演奏者）がこの近くに座る

⑥ 鏡板

老松が大きく描かれている。神が松に宿り、その神に芸能を捧げると伝えられる

⑦ 切戸口

地謡（合唱の人）や後見（補助する人）の出入りに使う

⑧ 一ノ松・二ノ松・三ノ松

橋掛りの前の三本の松。順に小さくして遠近感を出している

⑨ 揚幕

演者が出入りするときに揚げる五色の幕

⑩ 鏡の間

揚幕の奥にある大きな鏡を備えた部屋。演者が最終的な身支度をする

団体紹介

大蔵流狂言の山本家は、室町時代に始まった狂言を今に伝える家柄で、東京を中心に活動しています。江戸時代には幕府の正式な儀式の場で狂言を勤めていたので、格調高く、気魄に満ちた芸風を持っています。